つた。其時耳を揃へて持て行たら何と云ふた。此の御恩はめつたに忘れしまへん、妾の心は此通りと書きよつた起請がこれや。欺された俺は諦らめがつくが、何も知らんと暑い寒いの不自由な目をして、奉公をしよると思ふと妹が不憫な。」

「そうか。譯を聞くと氣の毒な譯やなア。」

「今まで欺されて居たかと思ふと殘念な。」

「そらお前の怒るものも尤もや。」

「妹が不憫な。」

「もつともや。」

「殘念な。」

「道理。」

「口おしいわやい……。」

「ツ、ツ、……。」

「馬鹿。三味線の眞似してよる。オイ清やん。お前ばつかりやない。哄ふてなやが年甲斐も無い俺にもこんな物を書いてよるね。腹も立つやらうがマア辛棒して。」

「エ、お前もか。友達三人にこんな物を書きやがつて、叩き斬つても腹にいらぬ。」

「マア宜い。俺にまかし。惡うはせぬ。こうしよう。これから私の遊びに行く茶屋へ行て彼奴をしらして、三人車座になつて赤恥掻かして此大阪に居られん樣な目に逢はしたろ。」

「そうなとして吳れんと俺の腹が納まらん。」

「そんならこしらへを仕て行かう。」

夕方から羽織の一枚も引かけて、三人連れで南へ參りました。戎橋を南へ中筋を西へ曲りますと、兩側の行燈に灯が這入りまして、色町は何時に變らぬ陽氣なこと。（鳴物、三味線が入る）

「オイ臺イ公。なにをゲラ〳〵笑ふてるのや。みつともないがな。何がそない可笑しいのんや。オイ。」

「源やん、チョツと見てみ。向ふへ一疋牝犬が行くとあとから牡が三疋隨いてよる。あれもやつぱり皆起請を貰ふてるやろか。」

「馬鹿。犬が起請を貰ふたりするもんか。オイ清やん。此三軒目に『大梅』とした行燈が出てるやらう。彼方が俺いの行く茶屋や。俺いが這入つて內らの樣子を見るよつてに、呼ぶまで這入りなや。此處で待てゝや。姐貴。」

「オヽいやゝの。誰やと思ふたら源さんやないか。まア御機嫌さん。いつも御達者で。これ、おゝやん源さんが來はつたやないか。お蒲團持といでんか。さあどうぞお上り。マア長いことだしたなア。どないしてなアつたんだんね。チョツとも顏を見せんと。それはそうと、こつちの妓（小指を出す）